

陰影に富む哲理小詩：冰心『春水』再読

佐藤，普美子
駒澤大学

<https://hdl.handle.net/2324/1913936>

出版情報：“《春水》手稿与日中文学交流：周作人、冰心、滨一卫” 国际学术研讨会论文集. 1, pp. 94-98, 2018-02-06. 九州大学QR プログラム「人社系アジア研究活性化重点支援」「新資料発見に伴う東アジア文化研究の多角的展開、および国際研究拠点の構築」

バージョン：

権利関係：



陰影に富む哲理小詩

——冰心『春水』再読

駒澤大学 佐藤普美子

1920年代哲理小詩の嚆矢とされる謝冰心の『春水』(1923)は182首の小詩を取めている。母の愛、童心、自然を礼賛するいわゆる謝冰心の〈愛の哲学〉は、下記の詩篇に顕著に現れている。

造物者——

倘若在永久生命中
只容有一极乐的应许
我要至诚地求着：
我在母亲的怀里，
母亲在小舟里，
小舟在月明的大海里。

(一〇五)

造物主よ——

もし永遠の命の中で
ひとつだけ極楽が許されるなら
私が真心から望むのは
私は母の胸に、
母は小舟に、
小舟は月明かりの海原に。

(一〇五)

『春水』を代表するのはこの種の作品であるが、もちろん同詩集は、こうした温かで調和的境地を希求する作品ばかりで構成されているわけではない。全篇を通して目に付くのは、“弱者”、“无力”、“渺小”、“微小”、“稚弱”、“弱小”、“怯弱”といった、脆さや弱々しさを現す言葉である。冰心は、“小草”、“墙角的花”、“平凡的池水”などのありふれた自然物、そして嬰兒やか弱い人間など、この世で、人知れず懸命に生きる目立たない存在物に目を向け、その脆弱さゆえに持ちうる敏感さ、謙虚さ、誇り高さに新しい美を見出している。いわばヴァルネラビリティ vulnerability の発見といえる。

しかも、しばしば出て来る嬰兒のイメージは、単に無防備な存在、あるいは純粹無垢で天真爛漫な存在としてだけではない。人間の最も脆弱な形態でありながら、大人の目には見えない神秘の力を宿した最も敏感な、人間の原初的形態、しかも人にある種の恐れさえも抱かせる存在として現れている。

嬰兒，
在他颤动的啼声中

嬰兒は、
そのふるえる泣き声の中に

有无限神秘的言语，
从最初的灵魂里带来
要告诉世界

(六四)

限りない神秘のことばをもつ、
初めての魂の中からそれをもたらし
世界に告げようとする

(六四)

以上のように『春水』は、か弱く敏感な存在をライトモチーフとして、謝冰心のナイーブな「愛の哲学」を展開した小詩群であり、口語の弾力性を生かしたその自然な表現は、早期新詩にあっては積極的な役割を果たしたことはよく知られている。しかしその一方で、哲理詩としては、宗白華に見られるような深遠さに乏しく、抒情詩としては理が勝ちすぎて、時に格言詩のようないささか教訓めいた詩も散見するため、率直に言えば、それらはやや平板で退屈な印象を免れないものだった。

ところが、このたびの手稿本の発見を機に、あらためて、同テキストを読んでみたところ、以前とは違った印象を抱くようになった。

特に意外に感じたのは、同詩集の最終 20 余首には、焦燥感とある種の生々しさ、そして静かな批評精神を含んだ詩篇が現れていることである。それらは、同集の前半に置かれた清新な写景あるいはナイーブな哲理を表現した詩篇とは異なり、不安と焦燥の中で深められた情感の伴う哲理を表現している点であった。

未生的嬰兒
从生命的球外
攀着“生”的窗户看时
已隐隐地望见了
对面“死”的洞穴

(一六九)

生まれる前の嬰兒は
生命の球体の外から
「生」の窓をよじ登ってのぞいた時
すでにかすかに見えているのだ
「死」に対面する洞穴が

(一六九)

为着断送百万生灵
不绝的炮声
严静的夜里
凄然的将捉在手里的灯蛾
放到窗外去了

(一七〇)

百万の生霊を葬り去るために
絶え間ない大砲の音
静まりかえった夜
悲しくも手に捉われようとした灯蛾を
窓の外へ逃してやった

(一七〇)

生れる前の嬰兒や自ら身を焼きこがす灯蛾へ向けられた詩人の視線には、生と死の連関

を見抜く冷徹さと同時に、有限の生だからこそ生を受けた者への深い愛、そして理不尽にその生を奪う者への抑えた怒りも感じられる。以下の二首も、自然一造化の神への感謝を表現しつつ、同時に不安と焦慮をにじませており、自然の哲理を牧歌的に表現したものに比べるといちだんと陰影を増している。

我怀疑的撒下种子去	私は疑いながら種を播き
便闭了窗户默想着	窓を閉めて黙想している
我又怀疑的开了窗	また疑いながら窓を開けたら
岂止萌芽	ただ芽を吹いたばかりか
这青青之痕	この青々とした跡は
还滋蔓到他人的园地里	別の人の畑の中まで生え広がる

上帝呵！	神よ！
感谢你“自然”的风雨！	あなたの「自然」の風雨に感謝します！
(一七五)	(一七五)

战场上的小花呵！	戦場の小さな花よ！
赞美你最深的爱！	おまえのこの上なく深い愛を讃えよう！
冒险的开在枪林弹雨中	危険を冒して弾丸雨飛の中に咲き
慰藉了新骨	死者を慰めている
(一七六)	(一七六)

これらに見られる生命感を捉えるある種の生々しさと批評精神は、『春水』の世界に独特の陰影を与えている。ところが、これまで謝冰心文学のキーワードなるものに引きずられていたためだろうか、不覚にも私は見逃しており、また多くの読者があまり注意を払ってこなかった「陰影に富む」部分でもある。

ところで、1920 年代初めの新詩壇に広く小詩ブームが興った要因の一つに、周作人による日本の短詩型文学の積極的な翻訳紹介があったことはよく知られている。冰心の『春水』は、『繁星』の序文で冰心自身が述べているようにタゴールの影響はあったにせよ、師である周作人の日本の俳句や短歌に対する評価と愛着に共鳴したものと考えられる。

周作人の評論「小詩を論ず」「醜い字句」（共に 1922 年 6 月）は新しい文学表現への関心と模索を示すものだが、特に前者は「真実簡鍊」な詩歌の例として日本の短詩型文学を紹介し、冰心の『繁星』中の 2 首にも言及する。同篇は決して新詩のために外国（主に日本）

の短詩型を鼓吹しているわけではない。あくまで大切なのは「真実の感情」「真実の生活」の表現だと繰り返し述べ、「小詩の第一条件は実感を表現すべきことである」と強調している。そして、小詩は「簡潔で含蓄がある」の点で「真実の感情」「真実の生活」「切実な思い」と結びつきやすく、また「刹那の内面生活」にはわざとらしさが入り込みにくいとしている。¹

また、「醜い字句」の中でも、彼は啄木の詩論「歌のいろいろ」(1910)²を引用し、「狭隘な既成観念」に、「鋭敏な実感」を対置させ、その重要性を指摘している。³

当時の周作人が拘った「実感」とは、仰々しいポーズや気取った物まねの言葉ではなく、素朴でありながら切実感を伴う焦慮の念であり、時には身体感覚を喚起する生々しいものであった。「実感」表現にすぐれる日本の詩歌、ことに石川啄木や与謝野晶子への愛着と親近感、周が彼らの文学に溢れる斬新で生々しい「実感」に深く共鳴するところから生じている。「日本の詩歌」(1921年5月)でもたびたび実感の表現に重きを置くという言葉が使われている。⁴特に与謝野晶子のいう「実感」の五つの条件——真実、独特、清新、幽雅及び美しさを引いているのは興味深い。

冰心の『春水』の大半は哲理詩であり、ともすれば理が勝ち、情緒に乏しい印象を与える詩篇もある。しかし、上述した四首のように、ある種の生々しい実感を伴う詩篇があり、さらに他にも、日常のひとこま、ささやかな出来事の観察を通して、時の移ろいや自然界の生死の定めひそかに心を震わせる抒情的な詩篇がある。

嫩绿的叶儿

也似诗情么

颜色一番一番的浓了

(三五)

さみどりの葉は

詩情に似ていないか

一回一回と色濃くなっていく

(三五)

人在廊上

书在膝上

拂面的微风里

知道春来了

(四七)

人は廊に

書は膝に

顔をかすめるそよ風に

春を知る

(四七)

¹ 「論小詩」、『周作人散文全集』(広西師範大学出版社、2009年4月)第2巻、557頁—559頁。

² 「東京朝日新聞」明治43年(1910)12月10、12、13、18、20日に連載された。『石川啄木全集』第4巻(筑摩書房、1980年3月)所収。

³ 「醜的字句」、『周作人散文全集』第2巻、684頁。

⁴ 「日本的詩歌」、『周作人散文全集』第2巻、320頁、328頁。

鱼儿上来了	魚が上って来た
水面上一个小虫儿飘浮着——	水面に小さな虫が一匹浮かぶ——
在这小小的生死关头	この小さな生死の瀬戸際
我微弱的心	私の虚弱な心は
忽然颤动了！	突然小刻みに震えた！

(一〇四)

(一〇四)

いずれも恬淡とした言葉遣いの中に、詩人の繊細さが捕捉した実感が垣間見える。周作人の求めた実感の表現は、冰心の哲理小詩の中にもたしかに認められ、それが『春水』全体を変化と陰影に富む抒情哲理小詩にしている。

謝冰心自身はこれらの小詩が「まとまりのない思いや考え」(零碎的思想)に過ぎないと謙遜するが、日々湧き起こる刹那の感興を集めた、陰影豊かな抒情哲理小詩は、切実な実感を表現する自然な言葉を模索していた 20 世紀 20 年代新詩に、一つの有効な方法を示唆したものだともいえる。

暗くはるかな道をゆっくりと歩み、自分自身の足音に耳を傾けるような内省的な詩人のつぶやき——それは暗闇の中で聖なるものを求め続けた冰心のひそやかな声として、百年近い時空を超えて聞こえてくるような気がする。

当我自己在黑暗幽远的道上	おのれ自身が暗く奥深い道にある時
当心的慢慢走着	注意深くゆっくり歩きながら
我只倾听着自己的足音	私はただおのれの足音に耳を傾けている

(六八)

(六八)